

なかにし礼



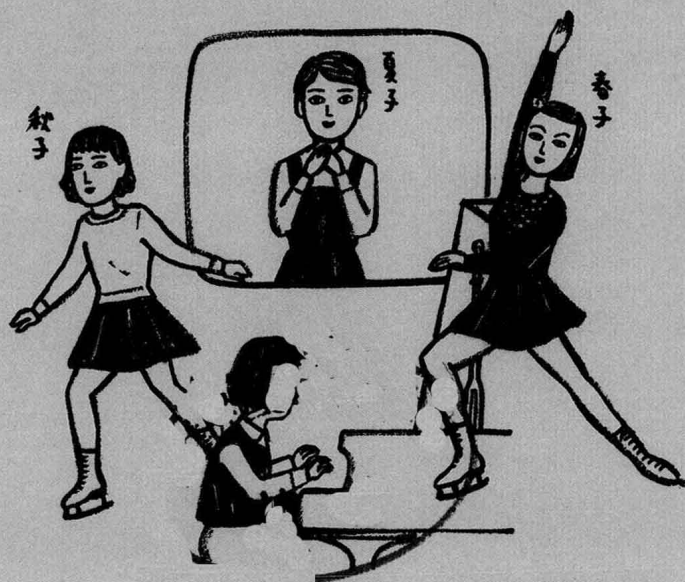
昭子さん
坊主の

下



新潮社

てるてる坊主の 照子さん



新潮社



てるてる坊主の照子さん 下巻

二〇〇二年七月二〇日 発行

著者 なかにし 礼

発行者 佐藤 隆 信

発行所 株式会社 新潮 社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部 〇三三六六五二二

読者係 〇三三六六五二二

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小
社読者係宛お送り下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Rei Nakanishi 2002, Printed in Japan

ISBN4-10-445104-5 C0093

てるてる坊主の照子さん・下巻▼目次

お先まつ暗

5

てんやわんや

59

雨降りお月さん

137

ひとすじの光

193

本日は晴天なり

243

おまけ

305

あとがき

308

上巻▼目次

年中無休

雨のち曇り

あかんたれ

一から出直し

今がチャンス

未知との遭遇

めまい

チャンスのあとにピンチあり

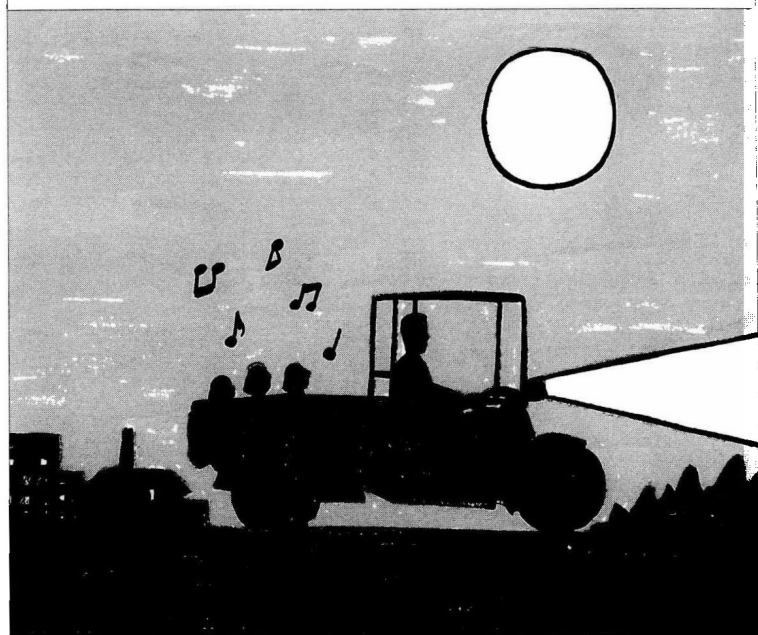
插画 峰岸 達
装帧 新潮社装帧室

てるてる坊主の照子さん

下巻



お先まつ暗



若さと本人自身の類いまれなる体力によつて、春子はめざましい回復を見せた。四カ月入院の予定だったが、二カ月半で退院することができた。

退院してまず最初にやったのは、梅田リンクに滑りにいくことだった。

氷の上に立った春子は、

「きゃあ、嬉しいわあ。滑りたくて滑りたくてたまらんかったわ」

満面の笑みをたたえていたが、一歩足を踏み出した途端、表情が曇った。

「足が重うてなんや怖いわ」

思うように滑れなかった。それでもこわごわと滑っていると、ほんと春子の肩をたたくものがある。見ると夏子である。

「おねえちゃん、よかったねえ」

夏子にはっこりと笑いかけ、春子の横を風のように通り過ぎていった。

「夏ちゃん、いつの間にあんなに滑れるようになったんやろうか。綺麗にもなったみたいやし。私、病気で目も悪なったんかなあ」

体が思うように動かない春子の目に、夏子のスケーティングはあまりに颯爽さつそうとして見えた。

夏子は小学校の五年生でついこの間、五級になったばかりである。自分は八級なんだから実力は雲泥の差であるはずなのに、それを見せてやることのできないことが悔しくてならなかった。ぼんと肩をたたかれたことも悔しい。肩をたたくのはいつも私だったのに。

母のほうを見ると、その目は夏子にばかり向けられている。自分の存在などすっかり忘れ去られたかのようであった。

春子は焦った。焦りがエネルギーになったのだろうか、春子は急速に運動能力を回復し、十日も経って夏休みも終わる頃にはなんとかもとどおり滑れるようになった。

学校が始まると同時に再び、朝七時からの早朝レッスンも始まった。相愛中学のスケート部は放課後、梅田リンクを練習場としていたから、そこでまたリンクの終わるまで滑った。

稲田悦子コーチのレッスンを受けるための東京通いも、また始まった。

梅田リンクの閉場後、売り上げを計算しつつ、札幌の一つ二つを別の袋に入れているのを見て、「あれは、私のスケートのためにへそくりしてるんやわ。おかあちゃんのためにも頑張らんとあかんわ」

春子はそう自分に言い聞かせるのだった。

昭和三十三年いっぱい、春子は調整に専念し、それでその年は終わった。

昭和三十四年の四月、春子は中学校二年、夏子は小学校六年、秋子は小学校四年、冬子は小学校二年生になった。

春子は今ひとつ伸び悩んだ。全関西選手権に出ると、上には必ず大川久美子がいて二位に終わり、全日本選手権では福原美和とやはり大川久美子がいて、三位に終わった。この二人をどうし

でも破ることができなかった。病気のブランクは意外に大きかったのかもしれない。

ところが夏子のほうはめきめきと頭角を現した。コーチは相変わらず田中で、練習もそう厳しくはなく、夏子はマイペースでのんびりやっていたようだけれど、六級のバジテストを悠々とクリアした。

そこで、梅田リンクで行われる全日本ジュニア選手権に出場することになった。ジュニア選手権とは五級、六級の選手によって争われる試合である。前年の七月の終わりに十三歳以上になっている者という年齢制限はあったが、夏子は、それに満たなかったにもかかわらず参考選手として出場が許された。これに優勝したら、六級であっても七級、八級の選手によって競われる全日本選手権への出場資格が得られるのである。

参考出場だから、そう意気込んではいなかったけれど、出るからには勝たねばと考える照子であつた。

「ほな、おかあちゃん、うち気楽に滑ってくるわ」

夏子はそう言つてリンクに降りていったが、照子のほうはどうしても力が入つてしまい、送り出す言葉も、

「そやそや、気楽に頑張つてきなさい」

妙なものになつてしまった。

規定はまあまあのように思えた。しかしフリーになると、夏子の滑走する姿はまるで白鳥のように見えた。

「こら大変やわ。また金の卵や」

思わず口にしてしまった。

美形でスタイルもいい夏子には、氷の上に立っただけで人目を引くなにかがあった。動くといっそう華がある。

二回転、二回転半のジャンプが決まると場内に溜め息のようなものが漏れ、激しいスピンのあとのフィニッシュも決まって夏子がつこり笑うと、どよめくような拍手が湧いた。

照子はわれ知らず涙ぐんでいた。

滑り終わった夏子は、顔をほんのりと上氣させて戻ってきた。

「夏子、凄^{すく}かったね。おかあちゃん感激して涙が出てきてしもうたわ」

「ほんま。うちも滑ってて氣持よかったわ」

夏子は波打つ胸をおさえながら言った。

場内が一瞬、静かになった。

「全日本選手権ジュニア部門女子の総合成績を発表します」

スピーカーから流れる女性の声は、なにやらもったいぶっていた。

「成績一位……岩田……夏子さん……」

「夏子、今なに言うてはった？」

「うちの名前やわ」

二人は顔を見合わせ、こくりとうなずきあい、手を取りあった。

「きゃあ、おかあちゃん、うちも一等賞や」

「いや、どないしよう。夏子、あんたも来週から稲田先生のとこへ習いにいかしてあげるわ」

「ほんまにほんま」

「ほんまにほんまや」

照子はすっかり興奮してしまつて、お金のことや後先のことを考える余裕をなくしていた。すぐ近くでは二位になった中学生の女の子と家族が、抱きあつてよろこんでいた。

「おかあちゃん、あんなおおきなおねえさんが泣いてはるわ。二位でも泣くほど嬉しいんやね」
夏子が声を低めて言う。

「アホらしい。二位ぐらいで、なあ」

照子もささやくように言った。

成績発表が終わつても誰一人動こうとしない。田中はちよつと渋い顔で腕組みをしていた。照子と夏子以外の全員が次のことを待っているようだった。

不得要領な思いで照子はきよろきよろした。

「お待たせいたしました」

また、もったいぶつた女性の声が流れてきて、

「全日本選手権、ジュニア部門女子の正式順位を発表いたします」

「なに言うてんのん。おかしなことを言うてからに。一位は夏子に決まつてるがな」

「優勝……」

夏子の名前ではなかった。

二位にも三位にも、出場選手全員の順位が発表されたが、夏子の名前は出てこなかった。

「えっ、嘘や。これなんやのん」

優勝はさつき二位になり、泣いて喜んでいた中学生だった。

「ねえ、田中先生、いったいこれはどういうことですか」

照子は怒りを込めて訊ねた。

「いやあ、だから最初から言うてましたやん、参考出場やいうて。そやけど成績一位ということ
は実力一位ということですから凄いやないですか」

田中は顔色一つ変えていない。

「一位いうても一位やないですやんか」

照子は舌を噛みそうだった。

「そうです。成績がいくらようでも順位には関係ないんですわ」

「なんでですもん？」

照子は食い下がった。

「そやから、参考出場いうて、あくまでも参考に出場したということですねん」

「そしたらなんで一位なんですか」

「あれは成績の順位です」

「ほなら、なんで夏子が優勝でけへんかったんですか」

「そ、や、か、ら、こないだ言うたと思いますけど、ジュニア選手権には、前年の七月の終わり
までに十三歳以上になっている者という年齢制限がありますねん」

そういえば、田中にそんなことを言われたような気がする。

照子はがつくりきてしまった。

「そやけど、こんなアホなことなんでしはるんやろう。夏子が可哀想やわ」

その時、夏子が声をあげて泣いた。その泣いてる姿はただの小学六年生の女の子だった。

「夏子、もう泣きなさんな。しゃあない。参考出場なんやから。そやけど一位は一位や。偉かったなあ」

照子がいくらなだめても、夏子は泣きやまなかった。

優勝した中学生とその関係者は、照子たちを怪訝けげんそうに見ていた。

「さ、帰ろうか」

「イヤや。こんなおかしいわ。絶対おかしい。うち、審判の先生らに言うてくる」

止める間もなく夏子はリンクに降りていき、すすい滑って審査員席に向かっていった。

「先生。私は一位やのに、なんで優勝やないんですか」

夏子は涙声で訴えた。

照子はあわててフェンスに沿って追いかける。

「成績で一位ということは一等賞いうことでしょう。一等賞は優勝でしょう。うえーん」

審査員席はリンクサイドの一番手前に位置していたが、夏子はフェンスにつかまり、身を乗り出すようにして泣きわめいた。

「あら、困ったわね」

審査員の中の中年の女性が夏子をたしなめた。

「あなた、コーチがおかあさまから聞いてらっしゃらないの。あなたの年では優勝できないのよ。またレッスンをしっかりなさって出場なさい。お待ちしてるわ」

「そんなん待てません。イヤヤ」

夏子はひととき大きな声で泣いた。両手で目をこすっている。まるで子供そのものだ。春子のこともあるし、心証を悪くしてはいけない。

「すいません」

審査員たちに向かって照子は頭を下げた。

「夏子、なんでもええから、早よこっちへ来なさい」

夏子はしょんぼり肩を落としてリンクサイドに上がってきた。

照子は夏子を抱きしめた。夏子の中にこれほどの競争心が隠されていたことを知って、照子は驚いた。

もつと気楽にスケートに取り組んでいると思っただけに、この真剣な傷つきように衝撃を受けたのである。

「夏子、ごめんな。可哀想なことしたな。ほんまにごめんな。この次こそは頑張ろうな」
なにを言っても夏子はじつとうつむいたまま、返事もしない。

二人は梅田リンクから池田の家まで一言も話さないで帰った。
夕ご飯も食べないで、夏子は部屋に閉じこもってしまった。

翌日、早朝レッスンに行く時間になっても夏子は下りてこなかった。

「夏子は？」

照子が春子に訊ねると、

「布団の中で一晚中泣いてたみたいやよ」

「ちよつとの間、スケート休ましたつたらええなあ」

春男が横から言った。

〈また気楽なことを言うて〉

照子は春男をちらりとにらんだ。

照子は二階に上がっていき、夏子の枕元に坐って言った。

「夏子、機嫌なおし。初めての試合やねんから腹立つこともあるやろうけど、また頑張つて、次の試合ではみんなを見返してやつたらええやん」

「イヤや」

夏子は布団をかぶつて向こうをむいた。

「一等やのに一等になれへんようなスケートなんか、もう嫌いや」

「そんなアホなこと言わんと。今まで一生懸命やつてきたことが無駄になるやんか」

「無駄になつてもええ。うちはもうがっかりや」

「なんでそんなに腹立つてんのん」

「うちはなあ」

夏子は布団から顔を出して言った。目は涙でキラキラと輝いていた。

「あの試合のフリーで滑つてるとき、もの凄う気持ちよかつてん。あの時、地球はうちを中心に回つててん。うちが世界の中心やつてん。うちに光がいっぱい当たつて、みんながうちに注目していて、うちの動きに合わせてあたりがざわついたわ。あの時、うちはほんまにスターやつたわ」